関西自然保護機構会報 14(2)：127－128，1993

# 竹生島でのカワウ観察会に参加して

吉　田　元　重

11月1日待望のカワウ観察会。浜大津に駆けつける。朝の湖畔は南の和歌山に比してやはり風が冷たく思わず襟を立てる。天気は曇り，風もなく湖面は静かである。昨年は折悪く台風の余波を受け風波が高く，折角琵琶湖の真ん中まで船を進めながら涙を飲んで引き返したことなど，思い浮かべつつ，期待をもって乗船する。

ユリカモメの群が船の後についてくる。観光客が慣らしたのであろう，投げたパンの切れ端を飛びながら上手に受け止める。飛翔しているカワウも数羽見られたが，この時期にはもっと下流に多いと教えて頂いた。資料によると，琵琶湖には58種の鳥が生息し，ガンカモ類が多いとのことである。私にはカイツブリのほかは区別ができなかった。

約2時間で竹生島に着く。水際まで森が迫っている。船が島の北西部に近ずくと森の様子が一変した。ここはカワウが巣を営んでいた場所だそうで，尾根部を中心に頂上まで，白く枯れた木が林立し，場所によって林床まで見える。島にカワウはいなかったが，春から初夏の子育てのころに3～4,000羽も住み，本年は600もの巣をかけたとのことである。北西の季節風が強いこの場所にどうしてウが集まり，巣を作るのかと不思議に思ったが，育雛期の季節には，ここは風陰となるのかもしれないと思い直した。餌が十分に保証され，人に敏感なウにとって静寂なここは絶好の場なのであろう。

西国巡礼札所の大きい寺院の裏山を上ってゆく。胸ほどの高さのチマキザサの中にタブ，モチノキの大木が黒々とした大きい樹冠を作っている。はじめて見るタブノキ－チマキザサ群落にみとれ，感銘する。頂上に近ずくとタブノキの枝がまばらにすけて見える。今年営巣した場所だそうで，樹冠の高い場所に巣が数個見えた。巣の材料にタブノキの枝を使うのであろうか。このように巣域が毎年外に拡げられ，樹木の被害が大きくなるとのことである。三角点に立つ。北西部の斜面の樹木の被害は特にひどく，すでに倒れているもの，太い枝と幹だけのものなど，まるで樹の骸骨の林に入ったような感じで，その間から湖面が見えた。ここには枝をもつ樹木がないから，この範囲での巣造りは不可能であり，巣域を外に広げる意味が理解できた。枯木の樹種はタブノキ，植林されたスギ，ヒノキが主で，胸高直径約60cmものタブノキは既に樹皮が剥げているから，枯れたのは昨年以前であろう。これには昆虫の食痕は見られなかったが，スギ，ヒノキの幹にはキクイムシのものと思われる潜孔が多く見られた。

ウ類の糞特有の生臭い悪臭が鼻につく。同行の皆さんはここで弁当を開いたのはさすがである。

カワウの羽根，卵殻の破片がそこここに散乱し，そして白い糞の名残りを葉につけているヤブツバキも見られた。糞の落下が多かった場所であろう，ここの地表はみどり色のラン藻？で覆われており，地面には何も生育していない。おそらく植物が生えられないのであろう。それにしても木本の低木層はほとんど無く，わずかにニワトコ，シロダモ，アカメガシワ，アオキが点在する程度であった。糞害の周辺部でも樹木は，かなり痛んでいる。亜高木のシラカシやシュロは葉をつけており，糞に対する抵抗性が樹木の種類によりかなりの差があ

るように思われた。日当たりがよくなったせいかイタドリ，ヨウシュヤマゴボウが大繁殖し林床を覆っている。頂いた1986年の植生調査表にはこれらの種の記録がないから，枯れたのちに侵入したものであろう。タブの極相林が枯れるとこのようなみじめな状態になるのであろうか。それにしても糞場にはチマキザサは見つからなかった。弱いのかもしれない。マツが枯れ，林床はネザサ，低木はアカメガシワとハゼノキの疎林からなる知多半島鵜の池とはずいぶん違っていた。むしろ田辺湾神島の場合と共通点が多いように思われた。ウの数が1,500羽と少なく，植物の種構成も違ってはいるが，鳥が止まる樹木の樹冠の変容，低木やツル植物の枯死や衰弱のようす，林床の植生の変化など大変よい勉強になった。

調査中に降り出した小雨がやがて本降りとなり，風も出始めたころ帰路についたが，私にとってすばらしい観察会であった。

（和歌山県日高郡由良町里101）